

チュウヒ 英: Eastern Marsh Harrie 学: *Circus spilonotus*

1. 分類と形態

分類: タカ目 タカ科

全長: ♂480mm, ♀582mm 翼長: 380-430mm
 翼開長: 1132-1372mm 尾長: 215-262mm
 嘴峰長: 28-31mm ふしよ長: 85-91mm
 体重: 498-844g
 ※榎本(1941)による.

羽色:

羽色は、個体によって様々で、全体に茶褐色の個体、頭部から翼の前縁部にかけてクリーム白色の個体、淡い褐色で胸から腹部に縦斑があり翼の雨覆が青灰色で尾羽が灰褐色の個体などさまざまである。こうした羽色の違いは、雌雄や年齢、繁殖地などで異なると言われているが(森岡ほか1995)、詳しいことは明らかでない。



写真1. チュウヒ。
[Photo by 小堀 脩男]

鳴き声:

縄張りに他個体が近づくとミビャア、ミビャアと鳴く。また、争いの際や他の猛禽に対してキャキャキャキャと鋭い声を出して威嚇する。さらに、オスは繁殖期の空中ディスプレイの際に、クェ、クェと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

バイカル湖付近からウスリー地方、モンゴル、中国北東部、日本などで繁殖し、日本や台湾、ボルネオ、フィリピン、東南アジア、中国南部などに渡る。

生息環境:

海岸付近の干拓地や大きな湖沼の周り、大河川の下流域などの広大なヨシ原である。

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

繁殖システム:

繁殖期

非繁殖期

多くは一夫一妻であるが、一夫多妻でも繁殖する。ロシアのバイカル湖付近では一夫二妻は観察されていないというが、日本では新潟県佐潟で1例報告されている(千葉2008)。

繁殖地では早いところでは3月ごろから空中ディスプレイが観察されるようになり、つがい形成される。産卵は4月中旬から5月に行なわれ、7月ごろ巣立つ。越冬地では10月ごろから生息するようになる。冬期は、日中には単独で縄張りを構えるが、夜間には集団罠を形成する。

生息数:

日本における繁殖つがい数は、確実に繁殖が確認されているもので30~40つがいと推定されている(浦2008)。しかし、北海道などではまだ未発見の営巣地があると考えられ、実際のつがい数はもう少し多いと思われる。一方、国

内の越冬個体の総数は、一部の地域における就罠個体数を別にすればまったく調査されていない。

巣:

巣は、地表に水のあるヨシ原や乾燥したススキなどの高茎草原の地上に枯れ草を積み上げて造られる(西出1979, 多田2007, 納家ほか2007, 千葉2008)。巣の大きさは、約110~130×80~90cmと報告されている(千葉2008, 納家ほか2007)。

卵:

卵は灰白色で、平均48.0mm×38.0mm(N=5)の楕円形に近い(千葉2008)。一腹卵数は4~7卵(千葉2008, 西出1979)で、産卵は平均3.3日間隔で行なわれる(西出1979)。

抱卵・育雛:

抱卵はおもにメスが行なう。抱卵日数は約28~34日の範囲と報告されている(千葉2008)。繁殖期はおもにオスが狩りを行なう(西出1979)。ヒナは孵化後約28日で巣を離れ、ヨシ原内を移動する(西出1979)。

ロシアのバイカル湖付近での調査によると、産卵された卵のうち巣立つことができたのは27~43%であった(Fefelov 2001)。

罠および就罠行動:

渡良瀬遊水地での観察から、罠環境は、ヨシやオギなどが疎らに生育し、下層にスゲ類やイネ科植物が高さ30~50cmに密生する場所である(平野ほか1998)。地上で就罠し、罠には夜間チュウヒがうづくまつてきた寝床が点在する(写真2)。

罠入り時刻は日没後20~30分がもっとも多く、朝の飛立ち時刻は日の出前20分ごろが最も多い(平野ほか1998)。



写真2. チュウヒの夜間の寝床。

4. 食性および狩り行動

日本での繁殖期の食性については断片的な観察例しかない。千葉(2008)によると新潟県佐潟ではネズミ類が多く、ヒバリも捕食した。ロシアのバイカル湖付近ではハタネズミ類が80%、小鳥類が20%であった(Fefelov 2001)。越冬期の食性は、渡良瀬遊水地ではカモ類を中心とした大型の鳥類が多く38.6%、スズメやヒバリなどの小型鳥類9.4%、ヒヨドリ、ツグミ類の中型鳥類4.7%、ハタネズミやジネズミなどの小型哺乳類31.9%、イタチなどの中型哺乳類2.8%、魚類1.7%と幅広い食性をしている(平野ほか2006)。

狩りの方法は、ヨシ原の上をゆっくり飛行して、地上付近の獲物を見つけると急に方向を変えダイビングして襲う「不意打ちハンティング」と呼ばれるもの、他のチュウヒや猛禽が捕殺した獲物を横取りする海賊行為、死体を摂食するものなどがある。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 冬期の採食環境

チュウヒの越冬環境は広大なヨシ原である(写真3)。しかし、どのような構造をしたヨシ原がチュウヒにとって住みやすい環境なのだろうか。

まず、渡良瀬遊水地で、2000年の冬期に野火によって消失した裸地と隣接するヨシ原に調査区を設定して、採餌飛行の利用頻度を比較した(平野ほか 2003)。その結果、チュウヒは採餌飛行の際に野火による焼失地より燃え残ったヨシ原を有意に多く利用した(図1)。これは、チュウヒのハンティングに草丈の高いヨシ原が不可欠であることを示唆している。このことは、渡良瀬遊水地内の谷中湖の植栽された浮島設置区と湖面のみの調査区との利用頻度の調査でも、チュウヒは浮島の周囲で頻繁に採餌飛行を行ない、浮島のない湖面だけの場所はほとんど利用しなかった(平野 2005)ことから明らかである。

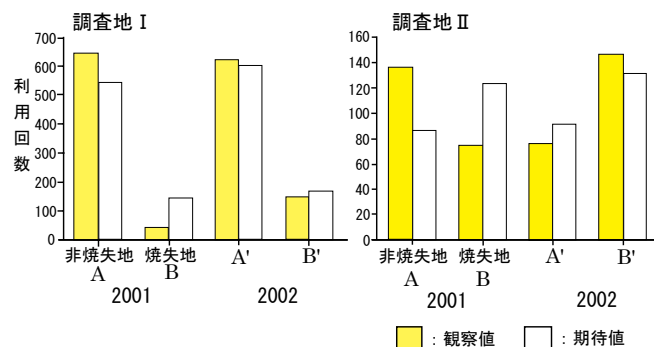


図1. ヨシ焼失地とヨシ原での採餌飛行における利用回数の比較。調査地 I, IIとも、2001年は焼失地(B)の利用回数が有意に少なかったが、2002年にヨシが回復した状態(B')になると利用回数に差はなくなった。

さらに、池沼や水路、管理用の道路が縦横に走る人為的に造成されたヨシ原と隣接する乾燥したヨシ原のみの調査区とでチュウヒの採餌飛行の頻度を比較した(平野 2008)。その結果、チュウヒは、2シーズンとも前者のヨシ原を後者より有意に多く利用した(図2)。こうした採餌飛行の利用頻度の違いは縄張り個体だけでなく侵入個体も同様であった。また、池や水路を含むヨシ原の調査区では、調査区を100m×100mのメッシュに区切り、チュウヒの採餌飛行の頻度を比較したところ、水路や池を含むメッシュは、植物だけのメッシュより有意に多く利用された。

これらのことから、チュウヒのハンティングには草丈の高い

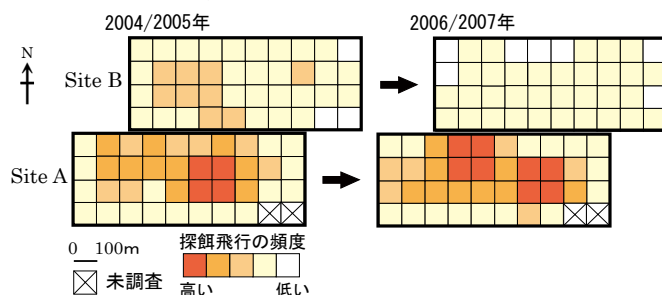


図2. 複雑な構造をしたヨシ原(Site A)と単純な構造のヨシ原(Site B)のチュウヒによる利用頻度の比較。

草原が不可欠であるが、単調な環境より細い水路や池沼が点在する複雑な環境がより好ましい環境と考えられた。こうした水路や沼を含むヨシ原がチュウヒに頻繁に利用される理由は、これらの環境にはカモ類などチュウヒの主要な獲物が多く生息すること、そのような複雑な環境は、チュウヒの主要な狩りの方法である不意打ちハンティングに適した環境であるためと考えられる。したがって、チュウヒの生息環境の保全には、池沼や細い水路などが含まれる多様なヨシ原を保全し創出することが重要であろう。



写真3. チュウヒの越冬環境。(渡良瀬遊水地)

6. 引用・参考文献

- 千葉 晃・佐藤吟一. 2008. 新潟市佐潟におけるチュウヒ *Circus spilonotus* の繁殖について. *Strix* 26:81-95.
- 榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧. 日本野鳥の会大阪支部.
- Fefelov I V. 2001. Comparative breeding ecology and hybridization of Eastern and Western Marsh Harriers *Circus spilonotus* and *C. aeruginosus* in the Baikal region of Eastern Siberia. *Ibis* 143: 587-592.
- 樋口孝城・広川淳子・浜田 強. 1999. 北海道石狩川下流域におけるチュウヒ *Circus spilonotus spilonotus* の繁殖状況. *山階鳥研報* 31:103-107.
- 平野敏明. 2005. チュウヒの採食環境としての人工浮島の効果. *Bird Research* 1: A15-A23.
- 平野敏明. 2008. 越冬期におけるチュウヒの採餌環境選択. *Bird Research* 4:A9-A18.
- 平野敏明・遠藤孝一・君島昌夫・小堀政一郎・野中純・内田裕之(1998)渡良瀬遊水地における秋冬期におけるチュウヒのねぐら. *Strix* 16:1-15.
- 平野敏明・君島昌夫・小堀政一郎. 2003. 野火が冬期のチュウヒの採食行動におよぼす影響について. *Strix* 21: 71-79.
- 平野敏明・小池勲・塚原千明(2005)渡良瀬遊水地におけるチュウヒとハイイロチュウヒの冬期の食性. *日鳥会誌* 54: 29-36.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
- 西出 隆. 1979. 八郎潟干拓地におけるチュウヒの繁殖記録. *山階鳥研報* 11:109-120.
- 納家 仁・小海途銀次郎・清水俊雄. 2007. 大阪府におけるチュウヒの繁殖確認. *Strix* 25:99-103.
- 多田英行. 2007. 仏沼におけるチュウヒの繁殖記録. *Strix* 25:87-93.
- 浦 達也. 2008. 国内のチュウヒの現状と晒されている脅威. 「チュウヒ Harriers. 全国の繁殖地・生息地から」近藤義孝編. pp.16, 日本野鳥の会三重県支部・日本野鳥の会愛知県支部・名古屋鳥類調査会, 桑名市.

執筆者

平野 敏明

NPO法人バードリサーチ 研究員



最近、1年の多くの時間を渡良瀬遊水地の鳥の調査に費やしています。特に、ここ数年はチュウヒの越冬生態から離れ、クイナ類やサンカノゴイ、オオセッカの生息状況を調査しています。渡良瀬遊水地を湿地性の鳥たちのさらなる楽園にするための基礎資料を得ようと、眠い目をこすりながら早朝の暗闇を歩き回る日々です。